

個々の思われを取捨選択することのできる可能性の根拠が『わたし』にあるということである」(95 頁) という指摘はよく考えられたものだと思う。著者の関心がいつも「知るもの」と「知られるもの」をめぐっていることが知られる。

『教師論』を扱った第四章でも同じ事柄が、次のように言われている。「与えられた認識が知であることを規定するのはアウグスティヌスにとって、認識されている対象のあり方、すなわち認識されている内容ではない。認識しているという働きは、『ことがら』そのものを対象とする認識であれ、『ことがらの像』を対象とする認識であれ、この意味での認識対象を有している。認識しているという働きに、いわば内属する『認識されるもの』を有している。このような内属する対象についての、それがどこにあるかの自覚をともなった認識が知なのである」(129-130 頁)。これは現代の現象学などが問題にしていることにも通じる鋭い洞察だと思う。

このように本書は長年の考究が熟して実を結んだものであり、我々が共同して立つべき研究の場をも明らかにしてくれる労作であると思う。

---

中山 善樹 著

『エックハルト ラテン語説教集——研究と翻訳』

創文社、1999 年、508 頁

岡 安 喜 代

本書は著者の、『エックハルト研究序説』(創文社、1993 年)に続くエックハルトの研究書であるとともに、『キリスト教神秘主義著作集 7 エックハルト II 創世記注解 ヨハネ福音書注解』(教文館、1993 年)に続く、いま一つのエックハルトのラテン語著作の大きな翻訳でもある。本書は、第一部を研究篇とし、エックハルトの聖書解釈の方法についての考察から始まって、その主要テーマをテキストに則って解説し、第二部の翻訳篇を準備する。第二部は、エックハルトの五十六篇のラテン語説教、シュトウットガルト版批判的校訂版全集ラテン語著作第 IV 巻の全訳である。総序論に記されているように、この説教の位置づけについては、エックハルトの未完の『三部

作』の『注解集』に含まれるものか否かは確定されていない（なお、エックハルトの全著作の内容と構造については、既に挙げた『エックハルト研究序説』pp.5-9に詳しい）。内容的には、これらの説教は、一方で、著作としての完成度は高くなく草稿にすぎないことが K. ゴッホの見解を通して指摘される。他方でこれらの説教は、著者によると、聴衆を尼僧や信徒とするドイツ語説教に比べ、聴衆を学僧とすることから「よりいっそう学問的であり、そこで用いられている概念もより厳密である」。著者の指摘するように、ラテン語著作とドイツ語著作の内容的連関は一般的に認められているところであるが、「思想内容の豊富さ」と「表現の厳密さ」の点で、そして「テキストの信憑性」という点で、ラテン語著作はエックハルトの思想研究の基礎としてドイツ語著作に先んずるものであるとする著者の見解は、日本のラテン語著作研究の草分けである著者の一貫した立場であり、著者の研究全般を貫くものである。

さて、第一部研究篇では、著者は、エックハルトにおける信仰の知解を根本的な問題提起として、その知解がいかになされているかを主要テーマ別にテキストに則って提示する。すなわち、著者は、エックハルトの聖書解釈がことごとく、信仰についての「哲学者たちの自然的論証による」哲学的理解の営みであるとされていることを指摘した上で、続く各章において、「愛」、「神愛」、「恩寵」、「秘跡」、「三位一体」という、本説教に見られる中心的テーマについて、それがどのようになされているかをあとづけるのである。すなわち、まず、聖書解釈にあたり、エックハルトは聖書を「ひとつの有機体」とみなし、「一つの聖句のうちにも聖書の全体が反映している」と考え、そこから、聖書の連続的、逐語的解釈ではなく、少数の聖句を選んでそれに文字的意味よりも霊的または譬喩的意味に注目して解釈を施すというやり方をとっていることが挙げられる。こうした方法は、教父の伝統に即したものとも言えるであろうが、著者は、エックハルトが受肉と三位一体に至る信仰の奥義がすべて哲学的に知解されなければならないとしていることに、エックハルトの特異さを見出す。それは、一方真理の側からは、エックハルトによると「聖書のうちには、哲学者たちが諸事物の本性とそれらの属性について書いている事柄が共鳴しているものであり、特に真理の一なる泉と一なる根から、聖書においても、自然においても、存在することによってであれ、認識することによってであれ、真であるすべてのものが発出する」(*Expositio sancti Evangelii secundum Johannem*, n.2)、からであり、他方それが探求されなければならないのは、著者の言によると「人間の自然理性がそれ自身の内的動機にしたがって、

奥義の内奥にまで突き進んで行く」、つまりそれは人間理性の内的欲求であるからである。そして、著者によると、この信仰の知解においてエックハルトが到達したのが『『靈魂のうちにおける神の子の誕生』という根本事態』である。著者はエックハルトにおいては、「われわれの靈魂のうちで神の子が誕生すること、そして恩寵によってわれわれ自身が神の子となること、それが受肉と三位一体の哲学的意味であり、……エックハルトのすべての著作の言わんとする唯一の主題』であると見る。この言葉の意味するところは、続く章において主要概念の検討を通して探求されることになる。ところで、この知的探求は奥義を哲学的に基礎づけるものではなく、信仰の知解の一形態と言わねばならない。しかしそれは「理性の内的動機」に基づく哲学的探求である。著者は「理性の内的動機」についてここでは説明していないが、それが万物の根源と自己の根源への問いであることは、そこに自ずと含まれていると言えよう。また、エックハルトにこの問いを促したものとして、著者は、エックハルトに「神の恩寵に対する深い神秘的体験があった」としながらも、思想の内容が、非合理という通俗の意味での神秘主義であるのではないことを付言している。

次に著者は、上述のように、この信仰の知解が本説教においてどのようになされているかを、中心的な概念が論じられているテキストを検討することをとおして示してゆく。その際著者はテキストに密着し、必要なときにはそれを補ってエックハルトの思惟を丹念に追ってゆくという方法をとっている。それをさらに短くまとめることはエックハルトの個々の論証をたどる著者の仕事にそぐわない可能性もあるが、本書の紹介という観点から、著者の仕事についての一つの可能な理解を以下に示す。

まず取り上げられるのが、「愛」の概念であり、そこでは説教第 40 における、われわれの神への愛が、論じられる。すなわち、われわれの神への愛が、父なる神への神の子の愛という三位の愛を範例とする、神の似像たるわれわれの、原像たる神へ向かう営みであり、それは自分自身を超えて神へと向かうことで、原像たる神のうちにある自分自身に至るということ、すなわち、著者の言によれば「愛の本質は脱我としての没我」であることが明らかにされるのである。その際隣人が愛の対象となるのは、神への愛におけるこの脱我において隣人が自分と対立するものではなく、むしろそのうちに自分と同じように「神の似像ないし神そのものが輝いている」者として愛の対象になるからである。そしてそれに基づいて隣人愛の実践的側面が論じられる。続いて説教 6 におけるエックハルトの「神愛」についての考察が検討される。前章で

は、われわれの神への愛が考察されたが、ここでは、神のわれわれへのということからそれが考察されるのである。すなわち、神の三位を構成するのは神の自らの存在をわかち与える愛そのものであり、似像である限りの人間の靈魂もその三位の愛のうちに成立させられているのであるが、この存在論的事態を、それにふさわしい「いかなるものとも共通なものを持たない」「純粹な心」において実現すること、それがすなわち「靈魂における神の子の誕生」であり人間が神の子となることであること、そのとき「心」において実現される神への愛は、靈魂の成立においてすでに与えられている神の愛を受け取ることであるがゆえに両方の愛がそこでは一致していることが明らかにされる。

検討される第三の概念は「恩寵」であり、これについてはいくつかの説教に見られる恩寵の諸相が考察される。エックハルトにおいて、恩寵は被造物を存在せしめる神の無償の存在付与——神の自己付与の業であるとともに、神に向かわせるべく「善き人々にのみ与えられる」ものである。前者が「ある種の流出」であるのに対し、後者は「神自身のうちへのある種の回帰」である。つまり、前者が創造による人間の神の似像性という存在論的事実をなす、つまり靈魂の本質、実体に関わるものであり、後者は自らの存在の事実への人間の努力を助ける、つまり人間の能力に関わるものである。神における自己自身に向かう人間の能力はそれゆえ、「わたしは神の恩寵なくしては無である」ということの自覚、言い換えると「謙遜」に尽きるのであり、そのとき人間の能力において、すでに与えられている恩寵が動き出すのである。

第四に「秘跡」の概念が扱われる。著者によると、エックハルトにおける秘跡——聖体の秘跡についてはこれまで等閑視されており、エックハルトにおいて「靈魂における神の子の誕生」は秘跡に取って代わるものであるとする意見さえあることが指定されるが、著者はそれに対して、「『靈魂における神の子』の主題は……むしろ秘跡の持つ深い思想的意味を表すもののように思える」、さらには「エックハルトは……秘跡の持つ重大な意味を自らの思想の中心に据えていたように思われる」という見解を打ち出している。聖体の秘跡は存在論的に演繹される概念ではなく、キリストの制定による所与の事実であるが、キリストの体をいただき、キリストと一致するという聖体の秘跡は、「場所と時間とを超えて生じることであり、したがってこの世の外側で生じること」であるがゆえに、正しくなされるとき、それは言わば「靈魂における神の誕生」と同じ、神の子との一致となる。

最後に「三位一体」について、複数の説教から、各ペルソナ相互の関係と、創造における各ペルソナと被造物との関係性、神とわれわれの関係におけるペルソナの位置付けについての多岐にわたるその諸相が紹介される。個々の論証についてはここでは省略する。

本書の研究篇は説教に見られる中心的概念についてのエックハルトの言説を解釈者の恣意を可能な限り避けて整合的に紹介しようという試みであり、それについての以上の評者の解釈は、著者の仕事についての可能な理解の一つに過ぎない。著者はあえて限定的な解釈を避けて、エックハルトの様々な問題提起を提示することで、第二部の説教を読む手掛かりと理解の広がりを読者に与えることを意図していると思われる。エックハルトの言う信仰の知解が、与えられた命題内で行われる哲学的な論述であるのか、それともあらゆる信仰命題の演繹を目指しているのか、そうだとしたらそれが実際にはどこまで、どのようになされているのかは、本書の提示する論点から出発して、ここに新たに正確に翻訳されたラテン語説教において、読者各自が探求すべきことであろう。

---

大森 正樹 著

『エネルゲイアと光の神学——グレゴリオス・パラマス研究』

創文社、2000年、xii+377+45頁

宮本久雄

著者大森氏は精神医学者として出発しつつ中世哲学研究に転向され、トマスやエックハルトに沈潜しその道行きの途上ロースキを介してビザンティンの神学者パラマスに出会ったといわれる。書評子の管見するところでは、如上の氏の道行きは正しく心に関わる参学であった。その参学は現代的知の手法（精神医学など）によっては満たされず霊（プネウマ）の次元に参入するものであった。それはまた現代人の誰もが心密かに待望する次元の拓けであるともいえる。そのような意味での氏の参学の豊かな結実が本書なのである。